「ペンギン・ハイウェイ」の舞台となった町での不思議体験

～以下は、「日本ファンタジーノベル大賞 2017　スタート記念座談会」<下記URLをクリック>からの引用です。～

http://www.shinchosha.co.jp/prizes/fantasy/2017/zadankai/

ご自分が好む「不思議」というのは、具体的に作品としてありますか。

森見　僕は小学校から中学校にかけては、以前『ペンギン・ハイウェイ』という小説で書いたように郊外の住宅地に住んでいました。そして住んでいる町のすぐそばに、世界の果てみたいな、自分の日常とは違う世界の入り口がどこかにあるっていうことを感じさせてくれるものが、僕にとっての「不思議」でした。そういう妄想を自分に起こしてくれるものをすごく求めていたふしがあります。小学校三年生か四年生ぐらいのとき、割に趣味のない子どもだったんで、毎日、自転車でウロウロ走ったりしながら、なんだか不思議な感じのする場所を探してはここはいいな、と思ってるっていう。妹とか弟とかに言わせると、あのときお兄ちゃんは一体何をしてるのか全然分からなかったと。友達と遊ぶわけでもなく、休みの日になるとフラッと出て行って、どこで何してるのかよく分からない。

～この文章は、

「生駒検定＜全国版＞＜問２２＞の解答・解説 http://ikomakentei.seesaa.net/article/446774508.html?1486523422）

に掲載されているものです。～